

---

デジタルパンク通信 第八話 2000年10月号

---

Q 体操でしょうか。相撲でしょうか。

A 相撲です。

シドニーは最後のテレビ五輪だ。アテネからはインターネット五輪だ。

アメリカでは、NBCが放映権に7億ドルもかけたから、CM料かせぐためにぜんぶ録画でプライムタイムに放映した。そしてインターネット中継ができないように仕組んだ。でも本番とオンエアの間に半日もあるんだから結果はネットで知っている。

アトランタでは軽く20%を超えていた視聴率が、今回は13%台だった。インターネットを侮ったテレビの惨敗。クローズドな著作権での囲い込みというテレビ的なものの敗退。アトランタ五輪は、そこに本拠地を置くCNNやIBMマルチメディア部隊がデジタルメディアの祭典として誘致した。しかしテレビの負けがわかるまで、4年後もう一度やってみる必要があったわけだ。

アメリカのメダル数は金39個、計97個、ダントツ世界一だ。メダル数は国力を明示する。経済、文化、人口、政治力、気合い、などを総合した力。今回の上位10か国は、米露中豪独仏伊キューバ韓英。日本は15位。そんなものでしょう。国旗や国歌をかけて闘うというのは、オリンピックやボクシングのタイトルマッチぐらいだ。物流やネットで国境がなくなり、産業はボーダレスとなり、通貨も統合され、仮にいずれ国際紛争も減少すれば、国家が存在することを確認できる場は稀になる。

高橋尚子が走る。しかし私はその映像を見ることができない。これから行われる試合、アメリカのテレビ放映は明朝なのだが、その時刻に私は飛行機の上だ。そこで日本の新聞社のサイトにアクセスすると、文字でライブ中継してくれていた。ああニッポン女性が世界を引っ張っている。偉い。涙がでる。だから親戚に国際電話をかけて、受話器をテレビの前に置いてもらった。日本のテレビの実況が伝わってきた。回線のせいか、音がとぎれとぎれだ。でも音声だけというのは異様に興奮する。36年のベルリンオリンピック、前畑がんばれの情けない再現だな。

今回、シンクロや体操や柔道をめぐって、審査員の採点や審判の判断が物議をかもした。体操のように試合を見た後すぐ結果がわからず採点を待つ種目、つまりコンクール系を、陸上や水泳のように客観判断できるものと同じ土俵で扱うからそうなる。エンタテイメントとしては一級だが、競技としては大食い選手権の方が上だと思う。

柔道もジャッジが試合の全てを握る。選手でも観客でもない審判に結果を委ねてしまう。構造的な欠陥だ。誰か権威のある偉い人の裁断を待つなんて、非インターネット的、非パンク的ではないか。なんぼのもんじゃい、そこから全てが始まるというのに。これは絶対的な神を受け入れる欧米人にふさわしいシステムだ。乱闘好きの大リーガーも審判には従うのは、神と暮らしているからだ。審判に殴る蹴るの暴行を加えたりする日本のプロ野球はこの世のものではない。

その点、大相撲の軍配差し違えは大変な制度だ。行司の下した判断に土俵下から文句つけて、協議してくつがえしたりする。行司はいつもハラキリの覚

悟をしている。権威が分散していて、公正で、オープン。高度な統治システムである。欧米には真似のできないネット的なシステム。

---